

通いたくなるデイサービス

住み慣れた自宅での日常生活を支えるデイサービス（通所介護）。ただ、活動内容に不満があり、通う目的を見いだせない人もいるという。「通いたくなる場所」を目指して、魅力や特色づくりに取り組むデイサービスを訪ねた。（阿部明霞）

魚をたいてミンチにしたり、ショウガをみじん切りにしたり……。会話をしながら料理を楽しむ利用者の姿を見ると、まるで料理教室のようだ。

東京都目黒区のデイサービス「なないろクッキングスタジオ自由が丘」では、2015年の開設当初から、「料理」をメインの活動にしている。その日のメニューや食材について学び、軽い体操で体をほぐした後、料理を始める。調理台は立ったままでも、車いすや椅子を利用したままでも、作業しやすい高さにしてある。

この日のメニューはサワラのハンバーグ、牛肉とレンコンのきんぴら、きのこ小松菜のみそ汁など5品。ハンバーグを担当した小川友英さん（90）は、「おしゃべり半分、作るの半分といった感じでみなさんと調理するのが楽し

まるで料理教室 おしゃべり楽しく



①料理教室のような施設内で、忙しく手を動かす利用者ら（東京都目黒区で）②学校の教室のような施設内で、利用者は「授業」を受ける（千葉県船橋市で）

い」と話す。同居する娘の上田ときわさん（60）は「昔から母は料理が大好き。やりたいことに取り組んで、できることをさらに引き上げてもらっている」と感じている。車いすを使っていたり、体に不自由があったりしても、一人ひとりに合わせて作業を割り振っているのが、認知症の人や料理初心者も安心だ。脊髄梗塞で両足にマヒがあり、普段は車いす生活だという小杉俊夫さん（75）は、調理中はつえを使って立っている

ため、リハビリにもなっているようだ。「体が許す範囲で通いたい」と意気込む。「目的を持って楽しく通ってもらうには、何が必要か」。運営する「ユニマット リタ イアメント・コミュニティ（東京都）」によると、料理を取り入れた背景には、こうした問題意識があった。体操やレクといったよくある活動ではなく、自分が通ったり、親を連れてきたりしたくなるようなサービスを考えたいという。

ホテルのレストランでの調理経験者が講師を務め、本格的な和洋中やスイーツ、パンと幅広いメニューにチャレンジできる。食材費などを負担すれば、通常の介護保険のサービスとして利用可能だ。同社の神永美佐子事業統括本部長は「孫にスイーツを作りたいと積極性が出てくる人もいる。高齢者のやる気を引き出すことにつながっている」と効果を語っている。

千葉県船橋市のデイサービス「おとなの学校 船橋本町校」には、学校の教室のように黒板が備えられている。利用者は、国語や社会、算



学校を再現 1コマ30分「授業」も

数といった1コマ30分の授業を1日4コマ受ける。昼食は「給食係」が配膳し、体育の時間には機能訓練を兼ねた体操を実施。介護職員や看護職員が先生役を務める。

この取り組みは、学校のようないくつかの空間で過ごすことで、生活にメリハリを付けてもらうと、06年に熊本県の介護施設で始まった。授業のためのテキストも作られ、全国の約600の施設で使われているという。

授業では、会話が弾むような工夫がされていて、思い出すことで脳の活性化につながる。

なげる回想法を取り入れているのが特徴だ。例えば、国語の授業では、年越しそばの写真を見せて、子どもの頃に食べたそばは好きだったか、何を思い出したか、問題を解くのではなく、様々な話題を引き出すのが授業の目的だという。

11月に入塾した藤原正明さん（83）は、脳梗塞の影響で認知能にも問題が出ていた。家にいると寝て過ごすことが多いが、送迎の車を見ると「学校に行くんだ」と気持ち切り替わるといふ。「知らないことが学べて面白い」と話している。

を超えて最多だった。本人だけでなく、家族にも「自分の親を通わせたい」「（将来）自分が通いたい」と思ってもらえるポイントと言えそうだ。

最近では、農作物を育てて販売するといった社会的就労ができたり、リハビリに力を入れたりして特色を強く打ち出し、差別化を図るところもある。同社の鈴木陽子主任研究員は「サービスを受けることになるかといった情報を積極的に発信するなど、利用者にとって魅力的で、地域に開かれた存在に事業者側が変化することが必要だ」と指摘する。

家族にも特色アピール

デイサービスでは、要介護者の生活を支えるために機能訓練を兼ねたレクリエーションなどをするほか、入浴やリハビリができる施設もある。団塊の世代が後期高齢者となる2025年以降、ニーズはさらに高まると想定されるが、事業所ごとの具体的なサービスの内容は、情報発信が少なくわかりづらいことなどから、通う目的を見つけにくいという指摘もある。

厚生労働省の補助金を受けて三菱UFJリサーチ&コンサルティングが実施した19年度の調査では、利用のきっかけは、利用者本人、家族の回答とも、「家族の希望」が半数